〈論文〉

東亜同文書院生の記録からみた20世紀初期の満州における農地開発に関する研究

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長
愛知大学文学部教授　藤田佳久

1．はじめに

本研究は、20世紀前半期の満州における農地開発の進展過程とその要因について、当時上海に設けられていた高等専門学校である東亜同文書院（昭和14年に大學へ昇格）の学生たちの調査旅行記録をベースにし、明らかにしようとするものである。対象時期はほぼ満州事変期までとする。

2．当時の満州の移民と農業

当時の満州は、清朝末期から辛亥革命による中華民国への変革期、さらに満州事変から満州国の成立と満州国による支配期へと大きく変化がみられ、本格的な日本人の農場移民が進むなど、激動の時期であった。

清朝の時代、満州一帯は清朝の聖域として19世紀の末期まで漢民族の農民や商人の移民は禁止された封土であった。そのような中、ごく一部の漢民族が漏れるように入り込んだ例はあるが、それは不法移民であり、隠れ移民であった。

それが大きく変わったのは、1860年代になって満州北部からロシアの勢力が浸透し、少しずつ南下が見られるようになったためである。当時、清朝政権の中枢と主力の軍部はほとんど北京に集中し、北辺の守りは希薄になっていたこと、また各旗を中心にした部族も北京の生活に慣れ、北辺の守りへ積極的に移動しようとしなかったため、清朝政府は漢民族の移民を入れてロシアの南下政策に対処しようと漢民族移民の部分的開放を図ることになったのである。

しかし、いきなり風土の異なる満州で定着農業ができるわけはなく、当初は夏季を中心とした出稼ぎ形態が多かった。定着が見られるようになったのは20世紀に入ってからで、それも本格化するのは1920年代であった。この時期辛亥革命後の中華民国では、袁世凱の政権が失敗し、各地に軍閥を中心とした地方政府が生まれ、軍閥同士の争いがめだつようになった。中には山西省の閻将軍のように安定した治政を実現した例も見られたが、多くはお互いに戦い、住民からの増税を強制する例が多かった。山東省もそのような例が顕著で、そのため戦乱と増税から免れるため、多くの住民がその逃げ場を満州に求めた。山東省は満州が他の省にくらべれば目の前の距離にあり、満州へ逃げることが比較的容易であった。そのため、満州への移民の出身地は山東省が圧倒的に多く、ついで直隷省が見られた。いずれも満州に近い省である。

こうして、満州の漢民族による農業の骨格は山東省出身者による山東省的な農業がおこなわれることになった。そしてその中心は南満州の地が選ばれた。

その一方、満州東南部の間島地域では、それより前の19世紀後半から近接する朝鮮から朝鮮人の農民が少しずつ入り込み、一部に水田耕作を試

み、満州で水田耕作が可能であることを示した。しかし辛亥革命の後、軍閥が満州にも成立すると、間島地区もその支配が及び、水田を開発した朝鮮人農民は彼らから土地所有権をめぐって圧迫され、水田を含む耕作地が奪われたりした。この問題はのちに間島問題として浮上することになる。

満州が満州族の聖地であった時代、地元蒙古民族の住民はもっぱら牧畜に従事し、農地はごくわずかにすぎなかった。広大な草原は羊や馬などの飼育場であった。したがって漢民族が移民として入り込んでくると、牧場に境界線がはっきりしないこともあって、彼らは自分たちの草原が漢民族による耕地化のため侵食される勢いに負け、特に清朝崩壊後はその動きがいっそう加速した。こうして、満州族はより辺地へとその居住範囲が追いやられ、その居住範囲は狭まれた。

そして日本人が最後に満州の農地開発に加わった。その始まりは日露戦争後しばらくしてからのことであり、いくつかの試みから始まった。

その始まりは大正3年から大正6年の4年間の試みであったが、南満州鉄道株式会社の満州鉄道守備隊の除退者のうち34戸による南満州鉄道付属地内での農業の試みであった。しかし、経営のセンスがなかったり、漢民族に転貸しして小作料を狙ったり、一攫千金を狙ったり、などの理由で挫折した入植者も出て、半減したりした。一方、継続農家はそれなりに経営をなりたたせた。

また、同じ時期の大正4年、満州南部の錦州付近に愛川村という名前の開拓村が作られ、農業移民19戸が入植した。これは当時の関東庁の実施によるものであったが、初年度が不作であり、当初は灌漑用水もなく、生活の変化に不慣れなことなどもあって、初年度ではやくも16戸が挫折、その後若干の補充もされたが、結局7戸のみが継続した。のちに灌漑用水施設も整備され、水田に開拓地の増加分をふくめ、昭和10年代になってようやく自立化している。

この愛川村の例は、日本人による満州での農業がそう簡単ではないことを日本人にひろく知らしめた。東亜同文書院生たちの記録にもこの愛川村について言及したものがある。

それゆえ、日本人農民による満州での農業進出は消極的であった。むしろ中南米や東南アジア方面への移民が目立った。

そんななか、南満州鉄道株式会社の系列会社にあたる大連農事株式会社が、昭和4年に日本人農業移住者を募集し、約3年で72戸の入植者を受け入れている。土地は年賦で沸け、建物や農具家畜は資金を貸し付ける方式である。しかし、借入金の返済がうまくいかず、また、新天地での不慣れな状況、不作や水害の影響などもあって、なかなか自立できにくかった。入植者の募集は昭和7年1月までで終了している。

それは満州事変の後、日本人の満州移民が対満州の国策の上で重要視されるようになり、満州各地のうち農業開発の適地調査がおこなわれ、当時の拓務省が昭和7年、第一回特別農場移民493名を北満州中心におくりだしたことに始まる本格的な日本人の満州移民政策が具体化したからである。いわゆる計画的な満州移民の始まりである。

この集団移民は翌昭和8年には494名、昭和9年には298名、と続き、昭和12年には5千名、昭和13年にも5千名、と大規模化した。昭和11年には拓務省は20年間に100万人を送り出す計画を出している。

その際の移民にたいしては、渡航費のほか、開拓費、建物や農具、家畜などの関連費の3分の1、そのほかの必要経費をふくめ、1戸当たり1000円ほどの補助金を与えている。農業経営としては1戸あたり平均10町歩ほどで、水田1－2町歩をふくむものの、全体としては畑作耕作を主とし、それに家畜用の放牧地、採草地を含むほか、共同の利用地も設定する規模と内容となっている。

また、この満州への集団移民が本格化すると、拓務省の計画以外に、自由移民とでも称する色々な形態の移民もあらわれ、拓務省はそれらが確実

な計画を持っている場合には補助の対象とし農業移民を進めた。

3．既存の地誌書で描かれた満州農業

次に、満州の農業がどのようにとらえられていたのかについて当時の若干の地誌書からみてみる。

まず大正7年に朝鮮及満州社の編集によって刊行された『満州地誌』の書名で記録された満州農業についてみてみる。

この書は京城にある出版社の編集によるもので、満州には近く当時としてはもっとも臨場感のある満州情報が得られたものと思われる。事実、満鉄など現地の多くの組織からデータをえているが、それでも北満州についての情報は入手が不十分であったとしている。日露戦争後、満州は日本人にとって関心の対象地になるが、具体的なアプローチの手段を欠き、満州一円の地理的情報を簡単に手に入れることは簡単ではなかった。満鉄もまさに南満州鉄道であり、南満州以外の情報はあまり手にしていなかった。対中華民国との間で結ばれた商租権も日本側にとっては民国側の抵抗があってスムーズではなかったことも日本人の満州への進出定着をおくらせていた。

そのような中、第一次世界大戦のなかでこの満州地誌が出版されたのは、次の時代を予見した意図があったのであろう。したがって当時の最新で可能な限えられた情報をベースに満州像を描こうとしている雰囲気が誌上から伝わってくる。地誌書であるだけに、満州の自然地理から人文地理まではばひろく記述されている。しかし、地図については全体図はもちろん地域図、主題図ともに1枚も描かれていない。地誌書で地図表現を書くのは珍しいが、当時まだ地図が作成できるほどの情報と技術レベルになかったということであろう。

このなかの農業はやく50ページほどを占め、人文地理のなかでは農業が重要であることをしめしている。

まず、全体の面積と耕地面積がデータとして示され、奉天省では耕地面積がかなり見られるが、吉林省や黒竜省では膨大な可耕地の耕作地化がほとんどすすんでいないとしている。その点で北満州に大きな可能性があると示唆している。そしてさらに南満州よりも北満州のほうが地味は肥沃であり、土壌の厚さは1メートルから1.5メートルもあるとして、北満州の農地開発上のおおきな可能性を裏づけようとしている。

ところで、面積の測量については、その単位がほぼ各省で異なり、しかもその換算もかならずしも正確ではない状況も記録から読み取れる。貨幣と同様に面積の単位もまた地域差がみられたことがわかる。

満州の農地開発史にもふれ、聖地とされてきた満州が光緒年間に南満州の奉天省内で、各地の状況に応じつつ耕作地に開放され、漢人が入満できるようになったこと、しかし吉林雀や黒竜江省では駐留する軍隊が自給用に農業をやった程度であり、その一部を開放する際にも貸下地として利用させたこと、ロシアが東支鉄道開設のための工事に多くの漢人が出稼ぎに奥地へ流入し、奥地へ入り込むきっかけになったこと、などが読み取れる。

具体的な農業については、農作物が説明されるが、それも南満州の奉天省が中心になっている。同省で主要な作物は、高粱、大豆、粟であり、これらの作物が品種別の説明も含め、詳細に記載されている。しかし、それらがまだ商品化されていなかったためか、それらの市場や流通についてはほとんど触れられていない。そしてそのほかの作物や畜産、養蚕などについても言及されている。

以上のように、まだ満州全体および満州の農業の把握は十分でなく、それもまだその南部の地域がやっと把握できたに過ぎなかったといえる。そしてまだ全体像を示すだけの情報を欠いていた。これはまだ日本人が実際に満州で農業経営に参加しておらず、農法や農地を巡る権利関係などを含

む具体像を描けない状況下にあったためともいえる。

次は、昭和5年に東京の古今書院から出版された田中秀作著の『満州地誌研究』である。

著者は地理学者、大正6年から5年間、満鉄株式会社に勤め、慣例の北満州から東満州などを広くめぐった経験をベースにしている。ただし、匪賊の出没する地域や交通不便な地域についてはさすがに足でかけめぐることはできなかったようである。しかし、現地に5年間滞在し、現地を地理学の目から確認できた点は前書に比べると大きな前進である。また、多くの詳細な地図も作成提示している点は、前書に比べ多くの情報を得たことと、地理学者として地図作成の技術と表現を駆使できた成果として評価してよい。

まず、序説では満州の開拓史が簡潔にまとめられ、その中で、満州の農業開発は清朝期であったことを言及している。すなわちその端緒は清朝が成立し、政権が北京に置かれると、聖域の土地が荒れるようになり、そこで農民を招来して農地をたがやかせたことにあったこと、そのため、順治14年には奉天府をもうけて漢民族の民生管理をしたこと、特に南満州では漢民族の流入が続き、農民のほか商人も入り込んで町ができたこと、蒙古については蒙古人と漢民族を切り離し、かれらの牧畜生活をまもったこと、しかし、内蒙古については漢民族が押し寄せ草原を農地にかえたこと、などを指摘している。

ついで満州の耕地面積に触れ、1928年のデータで、満州1兆町歩のうち、遼寧省は全面積2,358万町歩。うち、可耕地面積780万町歩、そのうち耕地化部分が538万町歩、また、吉林省は全面積2,117万町歩。うち可耕地面積が626万町歩、うち耕地化部分が376万町歩。最後に黒竜江省の全体面積5,524万町歩、うち、可耕地面積835万町歩、そのうち耕地化部分が352万町歩、という規模をしめしている。データのベースは満鉄であり、これがもっとも信頼できるデータだと思われる。それによると、可耕地面積の約半分が耕地化され、特に遼寧省では69パーセントが耕地化されている。反対に、黒竜江省ではそれが42パーセントにとどまっている。1920年代は漢民族が満州へ出稼ぎも含め押しかけた時代であり、耕作地が急増した時代である。このデータはほぼそれが一段落した時期、つまり満州事変の直前のデータだといえ興味深い。そしてこれは日本からの満州移民がその主役になっていく時代の直前の状況をしめしている。

なお図1は、同書に収められた満州の地域別総面積中に占める耕作地面積の比率を分布図として示したものである。それによれば南満州の中央部からハルビン周辺にかけての細長い帯状部分がもっとも開けている。それは満鉄の鉄道路線沿いでもある。その一帯は満鉄に近く、しかも日本側の警備が安全をもたらしたため、漢民族の入植者もこの一帯へ入り込んだとされる。

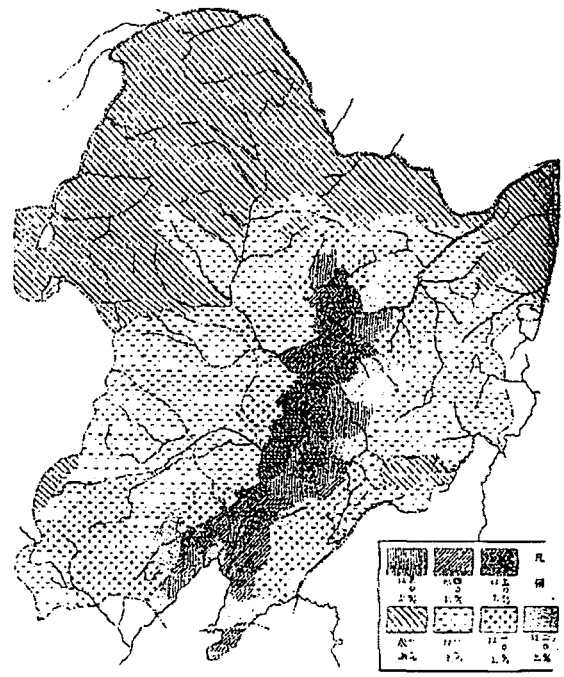

図1　満蒙地方別総面積に対する既墾地面積の割合略図
（田中秀作「満州地誌研究」より）

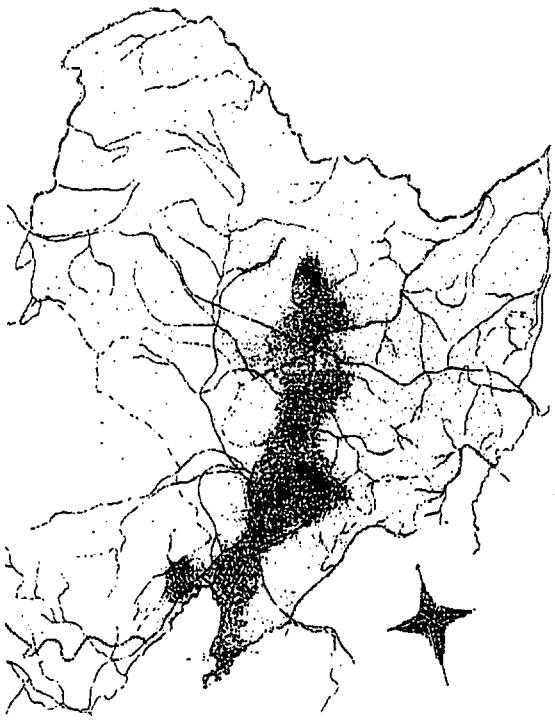

図2　満州大豆生産分布図
（田中秀作「満州地誌研究」より）

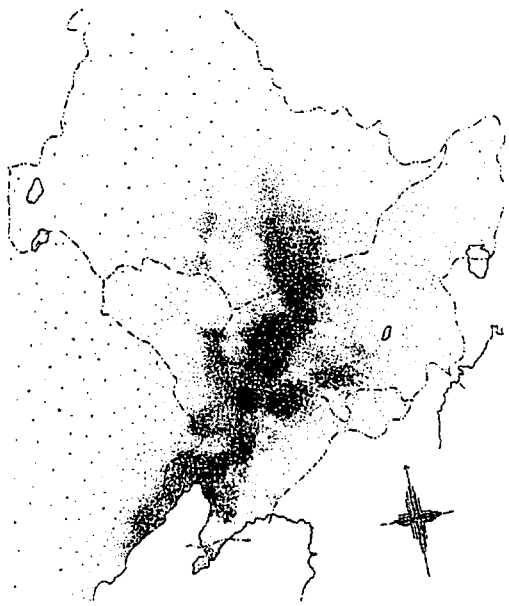

図3　満州高粱生産分布図
（田中秀作「満州地誌研究」より）

次に作物の分布が論じられている。詳細な作物分布図が作成提示され、その特徴が語られている。ここでは図2に大豆、図3に高粱、図4に小麦のそれぞれの分布図を示した。図2，3，は図1に対応した分布を示すが、図4の小麦の分布だけが

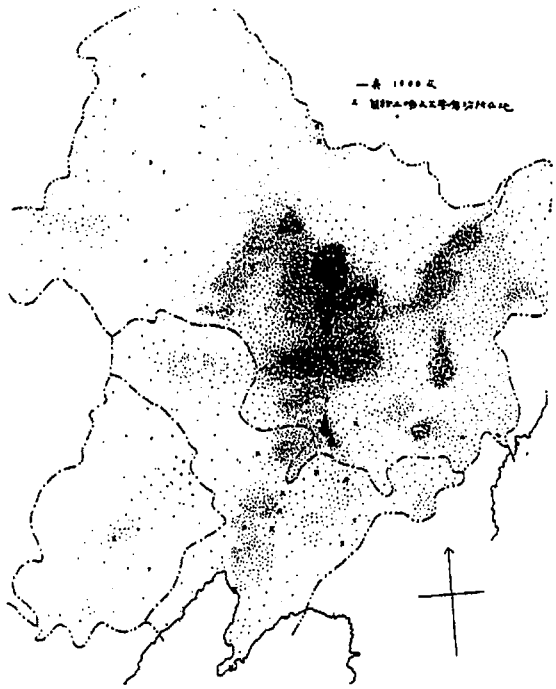

図4　小麦作付地と製粉工場の分布図
（田中秀作「満州地誌研究」より）

異なっている。すなわち、小麦は北満州に集中している。これは機構と豊かな土壌によるもので、ロシアが建設した東支鉄道沿線に多いことからも、ヨーロッパ市場をねらったこの輸送網も小麦の分布に影響しているといえる。

最後に農業方法にも触れ、農民には5種類があることをしめしている。すなわち、小作、分益農、共同農、請負農、自作農、の5つで、階層の差がどんどん拡大しているとしている。農耕法は一般に粗放的で、牛馬を使う。次々と新天地へ移動し、略奪農法もする例もみられ、その一方、輪作によって地力を維持する農法も特に南満州に多く見られるとしている。

3番目にアメリカ、シラキュース大学地理学教授のクレッシーによって1934年に出版され描かれた『満州、支那の土地と人』（1940、偕成社）をあげる。著者は上海の大學に滞在中、3年間に渡って中国各地を旅し、満州にも足を伸ばした。ちょうど満州事変直後の時期である。データはやはり満鉄のものがもっとも信頼できるとして使用

している。1920年代前半のデータである。

その中で、満州中央部の農業にも触れ、山東や山西などから漢民族が続々と満州をめざして入ってきており、その背景にはかれらの出身地山東省の戦乱や凶作があったとしている。満鉄もかれらのためにサポートし、山東省から大連などの港への船は1元でかれらを運んでいるとしている。図5は著者がしめした耕地の時期別開発地域の図である。

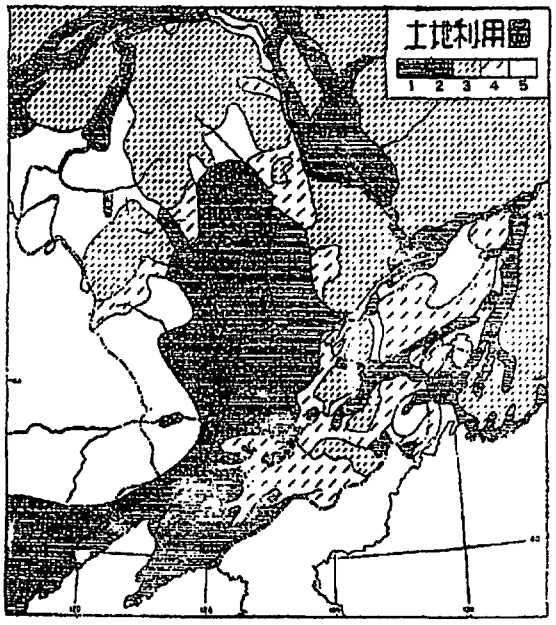

図5　満州における土地の利用
1．永く耕作された土地
2．近頃耕作されるようになった土地
3．二五%以上森林で被われている地方
4．二五%以下森林で被われている地方
5．森林のない地方（朝鮮を除く）
（クレッシー「満州・支那の土地と人」より）

この図からも満州における農地開発が1920年代に短期間で進められたことがわかる。

なお、著者は周辺の山々の森林資源が、清朝政府の崩壊によって濫伐され、禿山になってしまったことを指摘し、折から満鉄が永永と平野の真ん中にも植林を続けており、また、日本人が山で行っている植林を見習うべきだとも言及している。

4．東亜同文書院生の満州調査旅行記録

(1) 東亜同文書院生の大調査旅行の展開

東亜同文書院は1901年、文字どおり20世紀の開幕の年に中国上海に開学した日本の東亜同文会の経営によるビジネススクールである。

その発端は、明治10年代に当時の清朝の中国へわたった荒尾精が中国の実態を初めて知り、中国がそれまで日本人が知っていた漢詩、漢文に描かれた美しい国ではなくて、列強の支配に苦しんでいる国であること、しかし、同時に豊かな資源や工芸品の生産が見られ、欧米指向をめざす当時の日本にとってすぐ隣にある中国が十分貿易相手国になりうることを実感したことに始まる。荒尾はあわせて中国と提携することで、列強に対抗すべきことも実感し、それには中国の国力をつけるための教育の普及が必要だとの具体的な方法も実感した。そして、1890年、上海に日清貿易研究所という学校を作り、150人の学生に中国の実態と貿易実務を教育しはじめたが、5年目に日清戦争が始まり、撤退を余儀なくされた。

そして戦後、東亜会と同文会が統合して近衛篤麿が理事長になった東亜同文会が設立されると、日中間の教育文化交流による日中提携を打ち出した。近衛篤麿理事長の下、日本に中国留学生を受け入れる東京同文書院、朝鮮での普通および語学学校を開設する一方、1900年、南京に同文書院を開設、1901年には義和団事件を避けて上海へ移り、あわせて新たに上海東亜同文書院として発足した。その目的は、日中間の貿易実務者を徹底的な中国語教育を通して教育養成するものであった。後には中国人の教育をおこなう中華学生部も開設、さらに高等専門学校、そして大学へ昇格している。

こうして成立した東亜同文書院の特色は、前述した徹底した中国語教育と、5期生から始まる中国および東南アジアへの大旅行調査であった。特にこの大旅行調査は、生の中国をもっと知りたい

という書院学生の強い要望を実現したもので、その発端は、2期の卒業生5人が西域の2年間の調査に苦しみながらも成功し、外務省から若干の基金を得たことにあった。

大旅行は、専門学校時代は最終3学年の時期、高等専門学校になると、最終4学年の時期に実施された。普通5月に出発し8月か9月までの3ヶ月から5ヶ月間の、もっぱら徒歩で中国の農村地帯を中心に巡るまさに大旅行であった。旅行中多くの中国人、農民に会った書院生は中国に愛着を感じた。また、東南アジアでは、当時の植民地下の実情に触れ、その実態を知り、そんな中で地元の人たちから慕われている多くの日本人の活躍も目にしている。

1907年から始まったこの大調査旅行は1943年までの半世紀にわたって続けられた。1チームは2人から7，8人、総コース数は700にも達している。半世紀にわたってこれだけの調査を継続した例はほかになく、その点では世界最大級の調査旅行であったといえる。

書院生たちは個人個人が自分たちの選んだコースとテーマにしたがって、その成果を卒業論文として調査報告書を作成した。またそれとは別に旅行日誌も途中の時期から記録するようになった。さらに各期ごとに各コースのダイジェスト版を作成し出版した。これらの記録は、混乱期の当時の中国や植民地下の東南アジアではほかの記録がないだけに、当時の実情を伝える貴重な資料であるといえる。

(2) 満州地域の調査記録

そのような書院生による大調査旅行は当時の満州地域についても行なわれた。その概要を以下に示してみる。

最初の満州地域への大調査旅行は、1910年、第3回目にあたる第8期生のうちの1班によっておこなわれた。1920年代までは毎年10－20班のうち、1，2班、多くて5班が満州や蒙古の地域へ出かけているが、1911年から1915年、1917年、1923年、1924年、にはでかけていない。多くは中国本土と、1920年代に入ると少しずつ増える東南アジアへのコースが多かった。

しかし、1931年に、満州事変が起きると、以降2年間、それまで書院生の大旅行に協力的でビザを発行し、危険地帯には護兵の世話もしてくれていた民国政府は、ビザの発行を認めず、1932年と1933年の大旅行はやむをえず満州地域に限定された。そのため、1932年の大旅行は書院生に準備不足があり、また中国本土の大旅行の準備を楽しみにしていた29期生にとって、残念な声が多かった。しかし急なコース変更の中で、満州地域に各コースを設定し、次の年も含め満州各地についての記録を残すことになった。これも今日から見れば、満州に関する貴重な記録となったといえる。とくに、1933年の第30期生の満州調査旅行は満州各省の県単位で1県あるいは数県の調査がおこなわれ、よりきめ細かな調査がおこなわれ、貴重な記録となっている。この時期の調査の分析については、稿を改めたい。

5．東亜同文書院生が記録した満州事変以前の農業開発の展開とその特性について

(1) 東亜同文書院生の記録した満州農業についての記録と時期区分

以上のような書院生の満州ののうちには、当然満州についての農業の記録も含まれている。それらの記録は満州事変以前と以後について分けてみる必要がある。

すなわち、満州事変以前の場合は、書院生は純粋に満州について中国本土と同様に客観的に把握し、記録しようとしていたのに対して、それ以後についてはやはり客観的ではあるが、とりわけ満州国の成立もあって、日本の視点がややナショナリズム的に入り込んでいる面もときに見られるか

らである。つまり、この時期になると日本からの満蒙開拓団などが新たな農業移民として満州地域に入植し始め、満州農業にもうひとつの対象とする要素がふえることにもなったことで、農業に対する視点はよりシャープになっているのではないかと思われるからでもある。そこで以下、満州事変以前と満州事変以後について、時期を区分して検討し、本稿では満州事変以前の時期に焦点をあてる。

(2) 満州事変以前の農業記録から見た満州中、北部における農地利用

大旅行の初期においては、書院生たちはそのほとんどの地域で日本人はおらず、それゆえに自力で観察や調査をし、あるいは現地の中国人や機関からデータを集めるなど、かなり厳しい環境の中で調査を行った。それだけに、より自分たちの目できちんと観察し把握することが重要であった。そこにより純粋な地域を見る目があったし、記録内容の客観性が保たれていたといえる。

図6は第14期生が1916年におこなった大調査旅行のうち満州班がたどったコースとコース沿いに記録された農地利用についての部分を引き抜いて作図したものである。この班は、上悔を出航し、青島に立ち寄ったのち、大連に上陸し、そこから満州調査旅行を始めている。当時はまだ正式な日誌の提出がなく、この記録は、各学年の各班がダイジェストとしてまとめ出版した日記風記録によったため、記録は必ずしも詳細ではない。

それによると、大連から長春、さらに陶頼昭まで南満州鉄道を利用し、その沿線では高粱畑が卓越している様子が随所に書かれた記録から読み取れる。南満州鉄道は南満州の南北を貫く幹線鉄道であり、その利便性もあって農業開発がこの20世紀初期においてはやくも進んでいたことがわかる。遼東半島は比較的早くから漢人が清朝による満州の聖地化による封禁地の設定にもかかわらず、満州から近い位置にある山東省から漢人がもれるように入り込み、農地開発を行い定着したものである。1880年、ロシア勢力の南下に対抗するために、清朝政府は満州の一部地域を漢人に開放することによって、漢人が当初は出稼ぎ地とし

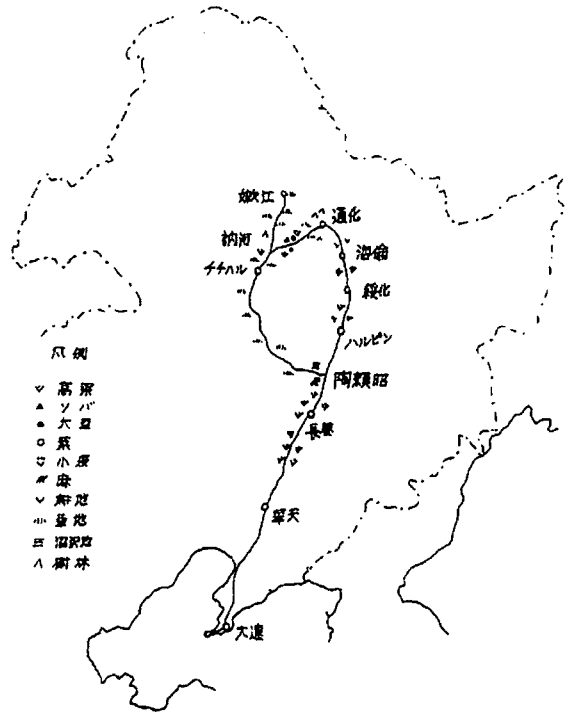

図6　第14期生大旅行「満州班」の日誌にみられるコース沿いの農地、草地の記録分布（1916年）
（「風餐雨宿」より作成）

て、南満州へ入り込むようになり、やがて彼らの一部は農民として定着するようになったのである。とりわけ、南満州鉄道が敷設された後はその利便性と、やがて満鉄の満鉄沿いの維持管理が徹底する中で、治安がよいこの沿線に山東省出身者を中心とした漢人の進出が進んだ。それがこの時期の満鉄沿線の耕地の分布として、書院生に記録されたのである。

陶頼昭からは、河川沿いの沼沢地の中を徒歩による陸行で進み、新城、杜爾伯都、昂昂渓、そしてチチハルまでの800華里を歩き通している。このコース沿いは湿原や砂地が卓越し、また、塩類を多く含むアルカリ土が多いため当時においても、今日も農地利用はほとんど見られない。チチハルはそんな不毛な土地の中の町であり、本来町

は形成されないはずであるが、清朝時代にアムール川を越えて南下するロシア勢力に対しての軍事基地として設定され、湿地の中に突如として出現した町である。したがって、書院生たちはこの当時あまりこの町に対して強い関心を持たなかったようで、すぐに再びノン河沿いに北上し、興安嶺の一部に当たる墨爾根まで徒歩と民船でたどり着いている。この一帯も草地で、一部に高粱の栽培が見られる程度の記録になっている。

墨爾根から東進が難しく、再びもとのコースを南下し、納河から東進し、徒歩で通化へのコースをたどっている。この間の一帯は土壌が肥沃で、大豆やソバが栽培され、野菜の栽培も観察している。実際、北満州にはこのような肥沃地が見られ、まだその多くが未開墾地であることも観察している。

通化からは南下してハルピンを目指して歩いている。その距離はおよそ600華里、ハルピンへの最後の100華里は呼欄から船で下っている。この通化からハルピンへのコースも比較的肥沃で、連続しているわけではないが、高粱が多く栽培されているし、未開拓地がまだ多いことも記録している。

このように、この班のコースは、ハルピンを中心にした北満州のほぼ中央部について、土地利用状況を記録しており、しかもそのほとんどを徒歩でめぐったという驚くほどの大旅行をしており、その観察も正確だと見てよい。全体としてみれば、彼らの記録から、ハルピンから西方は沼沢地で農耕地には不適当なこと、一方、ハルピンから北方は比較的肥沃であることが明らかになった。この点は今日においてもほとんど変わっていない。

なお、これらの農地の経営は、後述するように各論で言及されているが、多くは漢人だが、彼らはまだ入植して間もないこと、ハルピン以北ではロシア人、またアメリカ人が経営する大農場の存在も記録されている。南満州に比べ、農業開発はまだ北満州においては緒口に着いたばかりの状態にあることも明らかにされている。

以上のように、北満州では中央部の開拓地を除けば未開墾地が圧倒的に多く、また未開墾地のなかには、可耕地に不適な土地もかなりあることがわかる。耕地に不適な土地には、後述するように砂漠やその周辺の乾燥地が多いが、土壌が強いアルカリ性を持ち、そのままでは耕地に不適な土地もかなり多い。前述のハルピンからチチハルにかけての一帯は特にその特性が強い。この一帯は平坦地が続き、降水のはけ口がなく、湿地上の土地が形成されてきたためである。

この点について、1910年（明治43年）、大調査旅行で最初に北満州をめぐった8期生の「北満州班」の記録には、次のような一節がある。

> ハルピンよりチチハルまで253露里の多くは蒙古の空漠たる大平野を駆けるのである。はじめのうちほど彼処此処に低い森の蔭に人家五六眼に入り、畑もあり、馬や羊の群れも悠々と遊んでいるのを見たが、しばらくすると、万象悉く蔭を潜めて、坦々としてひとつの小丘すらない草原が天に連なっておるのみとなった。ムシロ惨足る光景である。而してこの惨めたる情感を増さしむるものは幾十町四面とも知れぬ水浅き沼沢の茫々たるそれである。小宅には、足萩一面に生えているが、水の深いところは姿を見せぬ。ああ、蒙古平野—。思うと錦斎線（別の班一筆者注）はいま如何にしているであろうか。首尾よくチチハルに出ることができうだろうか、と遥かに友の身の上に心も飛ぶのであった。鳥一羽だにいない淋しい野を久しくみておるに堪えないで窓から首を引っ込めた。

以上のように、ハルピンからチチハルにかけての広大な土地が湿地状態の未利用地になっていることが、その光景がうかびあがってくるように描かれている。今日では、その一部が水田に利用され、またチチハル周辺の広大ないったいは湿地性の鳥たちの保護区として世界遺産に登録されているが、基本的には当時とあまり変わってはいない。

(3) 満州事変以前の農業記録からみた満州東部の農地利用

一方、満州東部の農地利用については、第16期生が1919年に奉天から吉林、さらには革命直後のソ連領ウラジオストックまで巡った班の記録が最初である。

この班は班員7名。大連から奉天、長春を経てここから東方へコースを転じて吉林へ、そしてここからは徒歩での陸行となり、敦化、延吉、竜井村、会寧、琿春、ポセット、ウラジオストック、琿春、隠城、東京城、寧古塔、ここで西北部にある梅林へ往復し、自分たちで小船を買い、手漕ぎで増水している牡丹江を三姓へ下っている。三姓からは、松花江を船でハルピンへでた後、鉄道で長春、奉天、大連、上海のコースで帰院している。この松花江を下る途中にアメリカ人による2,000町歩ほどの大農場があり、多くの労働者が雇われていると記録している。ハルピン地域はもともとロシア人によって町も農地も開発されたもので、小麦のような商品作物は北満州に産地形成を見ていた。アメリカ人による大農場経営もそのような条件のもとで成立していたものであろう。

7月1日に書院をスタートし、10月10日に帰るまで、約100日間の大調査旅行であった。

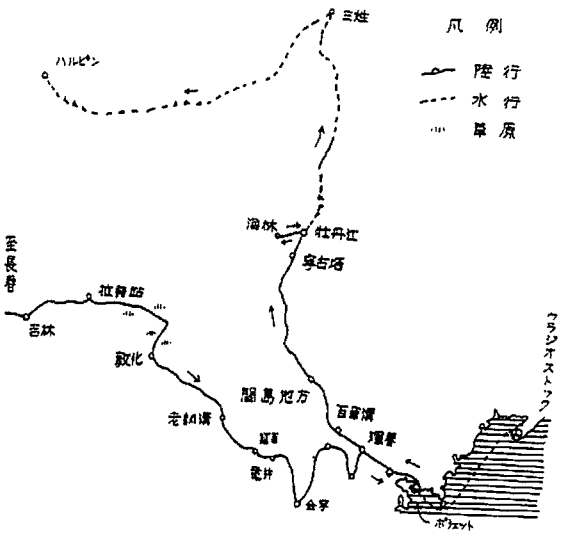

図7　第16期生（1919年）の満州東部地域の大調査旅行のコース

図7はそのコースを示したものである。吉林からいくつもの草原の山々を越え、敦化からは白頭山山系の北麓を回り、延吉へ向かっている。途中の山々は丘陵性で草原がおおいが、同時にこの地域は間島地域と呼ばれ、朝鮮人の農民がこの地域へ移住したケースが目立つ。班員の一人はその状況をつぎのように記録している。

> 間島は朝鮮人移住者多く、山の頂変から谷のどん底までかれらの手により隈なく開墾されているのが著しく目立つ。しかし、彼らのいわゆる移住問題は決して積極的転地の開拓ではないと思う。・・・彼らはできるだけ都会を避け、山へ山へと入り込み、不便極まりない谷あいなどに二三戸あて部落をなすが普通で、支那豪農の小作人が多い。都会地で商業を営めるもないではないが、商権はもとより支那人の握るところである。

この間島農民の移住は、とくに朝鮮が日本の植民地になったのちに増加し、それは同時に反日運動の拠点にもなった。また、日露戦争後は、ソ連が反日朝鮮人をソ連領内で恩恵を与え、反日の拠点がウラジオストック方面へ移ったとされる。班員たちはこの間島地域の調査でそのような状況にも気づいており、記録している。

しかし、この間島地域の朝鮮人農民たちは、この時期に苦労して水田を開き、のちに満州に水田農業が広がるきっかけになった。それだけに朝鮮人の水田耕作の成功は、漢人の地主や中国官吏の注目するところとなり、中国人の地主や官吏が朝鮮人農民の水田を奪い取る事件が多発した。この問題は反日問題とともに間島問題として日本と中国の間にあらたな火種をもたらした。

(4) 満州事変以前の内蒙古における農地利用

また、満州の西側の蒙古地方については、第8期生（1910年）の錦斉線旅行隊による旅行コースが最初である。この班は6人の班員が6月30日から9月9日の鄭家屯までのコースを記録して

おり、実際に上海へもどるのはもっとあとになるため、全体では3ヶ月ほどの大調査旅行であったといえる。

そのコースは大連から営口、錦州、朝陽へと内陸に向かい、あとは小さな馬店をつなぎながら、阜新、柳樹台、小庫倫、哈拉套街、影武県、小陵、平康、遼陽窩棚、鄭家屯、クーチャル、バーインサン、チェンコインツ、開通県、兆南、と比較的順調な旅であったが、後半は雨と遼河の大洪水で、目指すチチハルへはいけず、再び鄭家屯へともどっている。記録が鄭家屯でおわっているのはそのためである。

図8はそのコース沿いの農牧地利用を記録のなかから作図し、示したものである。このコースは平坦地が中心であり、全体としてみれば、牛や馬、羊などが放牧されている草地がかなり広がり、町の近くでは、おもに高粱、ついで粟、大豆が栽培され、ところによっては高粱が続いている光景が記録されている。また、乾燥地域で砂漠の東端の一帯にもあたるため、砂地も横切っている。

この班はこの行程のかなりの部分、とりわけ8月は毎日のように雨に降られ、ついには大洪水に見舞われ、危うく命拾いを経験している。そのため、チチハルへ向かうことができず、引き返すことになった。このことは、この蒙古の地域では夏にかなりの降水量があり、雨季があることを示している。今日でもこのコース沿いでは年間約500ミリほどの降水量があるが、それが春から夏、秋のいつ集中するかがかならずしも一定しておらず、それが気候の不安定要因になっている。書院生のこの記録はその一端を示しており、時にはこのような大洪水になることを示している。高粱の生育期や収穫直前の時期に大きな被害を受けることになる。

また、それどころか、命を失いかけた蒙古への大調査旅行班もあった。それは第15期生の5人による内蒙古班の班員の体験とその記録である。この班は長春から農安、そして前述した8期生が

図8　第8期生の満州西部大調査旅行コース（1910）と農地利用

チチハルまでいけず引き返すことになった兆安へ、さらに開通、鄭家屯へは第8期生のコースと重なる。しかしこの班はその後さらに西の方向にある熱河地方へ向かい、開魯、赤峰、熱河、そして北京へとコースを取っており、第8期生のコースとはかなり異なっている。全体としては草原が続き、蒙古らしいコース記録になっている。このコース最北の兆南では草に埋もれるほど草原の心地よさを満喫するが、7月中旬の時期にそこで洪水にあっている。鄭家屯へ南下するコースはここも草原が続くが、鄭家屯が近づくに連れ、森や林、そして水田や畑が出てくる。しかし、雨模様。それが次の40戸ほどの村の宿へ着いた7月30日、清河の氾濫に遭遇することになった。書院生の班員が大洪水に見舞われたこの村では、40戸のうち、村から筏を組み班員が脱出するまでに、わずか2戸だけしか建物が残っていなかったことが記録されている。おそらくはその後すべての土づくり家が洪水によって、溶けて流れてしまったものと思

われる。これでは農業どころではなくなってしまう。

各地でこのような洪水の被害が発生し、班員たちはところどころでそのような洪水の被害にあった農民の集団が町のなかに出てきて、とりあえずの住まいを作り、悲惨な生活をしていることを記録している。平坦地が多いこのような地域では、出水時に逃げる場所がないことで多くの溺死者を出すことは、あまり知られていない。班員たちは身をもってこの経験をしたのであり、貴重な記録だといえる。

なお、この大洪水から脱出した班員たちは、脱出先の白音他来で日本人に助けられ、すべての荷物を失いながら次の旅行を続けている。次の開魯では民国4年に蒙匪によって町が焼き払われた跡をみている。さらに洪水でできた沼地と砂地、そして草原を埋めるきれいな花々に感動しながらすすみ、王府を尋ねている。途中甘草ばかりが続く草原も記録されている。そして赤峰へ向かうがここでも水害とそれに伴う凶作で住民の反乱が多発し、通行客にまったく出会わないという状況についても記録している。次の熱河へは山と谷を進む。熱河には松が多いと記録され、それが美しい景色になっているという。そのコースを図9に作図して示す。

(5) 第22回（1928年）の満州地域の農地利用

以上のように、満州調査旅行が繰り返され、満州情報が少しずつ蓄積されていくと、コースの設定の中にもより広域のコースを目指す班も見られるようになった。そのようなケースのひとつが1928年におこなわれた25期生の6人の班員によるものである。この時代になると満州が注目され始め、この年15班のうち8班が満州を目指している。その背景には、1925年に上海で生じた五三〇事件が排英、排日運動を中国内にもたらし、中国本土よりも状況が安定していると考えられた満州を選んだものと思われる。しかし、出発時の

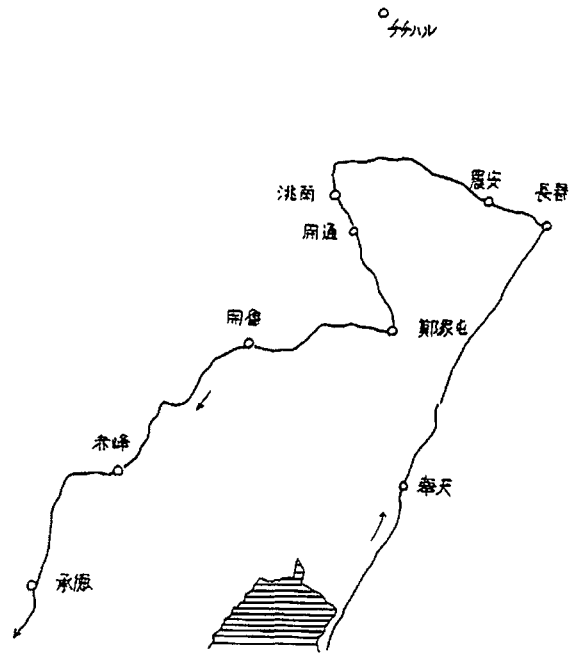

図9　第15期生の内蒙古コース

6月はじめには、東北地区の将軍となっていた張作霖が爆殺され、不安を伴う大調査旅行となった。班の中にはその現場跡を見たものもいたほどである。

そのような中で、この班は5月30日に出発し7月16日にハルピンで解散するまでほかの班にくらべるとやや短い期間であるが、満州各地をかなり広範囲に観察している。また、最初の満州調査旅行に比べると10年以上経過しており、満州各地にも若干の変化が読み取れる。特に、鉄道の開通や開通予定が新たな町を誕生させたり、ひなびた町が農産物の集散地として活性化するケースなどがそれである。

この班のコースは、大連から長春、四平と南満州鉄道を利用した後、支線に入り、鄭家屯から通遼を往復したあと兆南へ、そしてチチハル手前の昂昂渓から東支鉄道に乗り換え、西へ向かい、ハイラル、さらにソ連との国境の町である満州里まで出かけ、そのあと東へ戻り、チチハルから北上、興安嶺山脈を越え、黒竜江沿いでやはりソ連との国境の町である黒河へと向かっている。そして、黒竜江を船でくだり、松花江との合流点三江へ、

そしてそこから各地の港によりながら松花江をさかのぼり、目的地ハルピンへたどり着いている。なお記録者の一人は、このあと長春へ向かい、そこから吉林、延吉、次いで朝鮮へ入り、日本の出身地へ帰っている。

このコースはかなり長いのに比較的短い期間で実行できたのは、一昔前に比べ四平から満州里まで新しい鉄道を利用できたこと、チチハルから興安嶺山脈をまだよくない道ではあるが、自動車に乗せてもらったこと、さらに黒河からハルピンまで、途中は下車しながらも乗船できたことなど、交通の便の恩恵によくしたことがあった。そしてそのこと自体がこの時期の満州の開発発展を示すものといえる。

図10は、この班のコース沿いの農業的土地利用の状況について抽出し、作図して示したものである。

それによれば、四平から兆南にかけての南満州西部は、ソーダ分の多いアルカリ土壌地帯で、しかも砂地が多いため干害や風害が多く、農業には不適地であること、それにたいしては乾燥農業方式で対応し、民国12年以降、漢人が西部方面に入るケースも出てきたこと、しかし、兆南以北は黒土が多く、まだ漢人たちには知られていないが、土壌は肥沃であり、将来の開発が可能なこと、これは北西の風が卓越し、また、興安嶺山脈からの土壌の流下もあって、アルカリ土壌が薄められた土壌が形成されたためとしている。

兆南は鄭兆線の開通により、従来その背後に広がる草地を利用した牧畜業が活発化して、農畜産物の集散地として急速な発展をしめしつつあることも指摘している。

西方のハイラルから満州里にかけては、一帯が草原地帯で、羊を中心にした放牧地が卓越していること、町には東支鉄道線沿いに町をつくったロシア人が多いことも記録している。

チチハル以北の丘陵地は草原で、牛の放牧もみられたが、興安嶺の山地へ入ると、針葉樹の森林

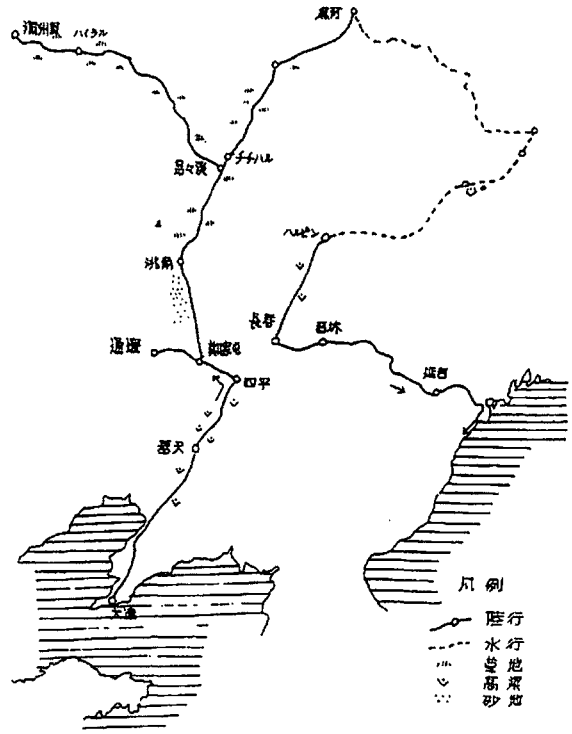

図10　第25期生（1928）の満州広域コースと農地利用

がカバーし、黒河に達する。黒竜江沿いにはほとんど農業がみられず、松花江との合流点である三江になって、初めてわずかな漢人の移民が今入植を試みようとしていると記録している。

しかも、三江から松花江を少しさかのぼった松花江では漢人の入植が全面的に失敗したとしている。その理由として、収穫のあと馬賊がたびたび来襲し収穫物を奪ってしまうこと、氷の解ける時期に河川が氾濫し、開墾地を流失させてしまうこと、必要とする農耕馬が夏に発生する大量の蚊によって弱くなり使えなくなること、などを指摘している。この一帯の馬賊は、のちに満州国になったあとも、組織的に農民を襲い、日本からの移民がこの地域に入植した時には馬賊が開拓地経営大きな困難な要素となった。

しかし、それよりも上流の佳木酢付近では、農地が開墾され、大豆や小麦の栽培が見られる、と記している。この一帯までさかのぼると、それまでの低湿地が洪積層の台地へとかわるため、畑の耕作が可能になるからである。のちに、日本人の

入植地がこの一帯に多く設けられたのもその理由からである。

以上のように、この班の大調査旅行コースは満州一円を巡るほどの大きなスケールでおこなわれ、それだけに各班員は満州の全域に近い状況を見ることができたといえる。それが満州の中の地域の違いや特性を認識させることになり、変化に富んだ記録となった。また、第8期生や第10期生の時代と比べると、交通ネットワークの整備が南満州鉄道の日本や中国、ほかの資本ですすみ、それが満州地域内に地域的な変化をもたらしつつあることも読み取ることができる。そんな中で、少しずつ漢人の入植者が満州の南部、つまり南満州だけでなく、試行錯誤をしつつ満州西部や満州北部へ局地的に、点状に入り込みつつある状況がうかがえる。書院生の記録には、漢人達が焼餅や葱、味噌をたべながら、グループで南満州鉄道の線路わきを北へむかって歩いていく光景が描かれている。この時期、山東半島から大連などへ向かう貧しい農民がふえたことにより、船の定期航路でかれらを満州へ運ぶため、日清汽船は無料あるいは低額でデッキパッセンジャーとして彼らを大連港へ運ぶサービスをし、また、南満州鉄道も彼らを特別低額料金で長春やハルピンへ輸送している。それにもかかわらず、徒歩で歩く農民たちは所持金はほとんどなかったことをあらわしている。このように入満してきた漢人達は既存の地主に雇われたり、南満州鉄道の敷設工事や木材の搬出などの労働力として雇われたりして出稼ぎや定住を図った。彼らの多くは山東省の出身者がほとんどであるが、それは民国の内戦が激しさを増していたこの時期に山東省の将軍が、軍事優先で農民たちを兵役に捕獲したり、食料や農耕用の牛や馬を挑発したり、重税を課したりしたため、農民たちは新天地とされた満州へ離村し、逃げ出したためである。したがって、経済的基盤を持たなかった彼らは満州ですぐに農家として自立できたわけではなく、条件の悪い土地に入り込んだりしたのであり、それが書院生たちの記録に残されたのである。

(6) 満州農業の自然的基盤

ところで書院生のこの大調査旅行は、各班員が調査報告書を卒業論文として提出している。これがこの大調査旅行の最大の目的である。満州農業の記録についても、土壌や気候条件、商品作物生産、農業経営、流通機構、貿易の仕組みなど多方面にわたっている。当時の満州は漢人の本格的な移住がはじまり、農業には高い関心がもたれていたからである。

そこではまず農業の根幹を成す満州の生態的環境を知ることは出発点としても重要であった。

この点について書院生は強い関心を持ち、何人も調査、観察をしている。日本との差異に関心も持ったのであろう。書院生も日本での農村出身が多かったからである。ここではそのうち比較的まとまっている報告書の内容を見てみる。

第24回（1930年、昭和5年）の調査報告書のうち第13巻は、「満州農業事情」のタイトルで多面的な記述がみられるが、そのうち、満州農業の自然的環境に関する部分についてまとめられている。それによると以下のとおりである。

この書院生の記録は1930年だが、前述した旅行記にも記されていたように、1928年6月に張作霖が爆殺されたあと、同年12月29日満州地域一帯は東北省として南京の国民政府の管理下におかれ、内蒙古は各民族の自治にゆだねられることになった。内蒙古は哲里木、烏遠、卓策図、錫林郭爾の4盟と38旗および特別の2旗でのあわせて40旗で、それぞれが「借地養民」のスローガンの下、順次肝心に農地や土地を開放させる政策をとった。そのため内蒙古にも漢人が容易に入り込むようになった。書院生の記録によれば、蒙古人は多くの土地を漢人たちに安価で買い占められたとしている。

このころのデータで、東北3省の土地面積は

65,624方里、人口2803万人、東部内蒙古は13108方里、人口450－500万人。詳細なデータは清朝時代にもなく、当然民国期にもない。そこでもっとも信頼の置けるのは満鉄のデータであるというわけで、耕地と未開拓地がそのうちどれだけあるかを示している。それによると、この時期毎年30－40万町歩が開墾されているが、耕地面積は1300万町歩、未開拓地は1200万町歩であり、蒙古地区では可耕地の9割が、黒龍江省では同じく8割が未開拓地である。それに対して奉天省では可耕地の8割がすでに耕地化されていて、地域間の格差はきわめて大きい。

とくに1920年代に入ると、山東省を中心に直隷省からも農民が、そしてそのあとを追って商人たちも満州を目指した。その目的地はみな南満州鉄道沿線とその沿線の長春やハルピン、奉天などの都市部であった。奉天省で開墾が進んだのは南満州鉄道の開通によるものである。しかも同鉄道の沿線付属地は治安もよく、多くの農民はその近くへの居住や入植を望んでいた。このあと満州国が誕生すると、この入植の動きは弱まり、漢人の移民は1920年代がピークとなった。そして1930年代に入ると、それにかわるように日本からの農業移民が目立つようになる。以上のような満州地域の大きな動きを見たあと、満州の自然特性が述べられる。

まず、土壌の特性をみると、吉林地方と満州東部一帯は第四紀の地層からなり、松花江などの河川沿いは沖積層、それ以外は洪積層からなっている。大雑把に言えば奉天以北には洪積層が多く、奉天以南には沖積層が多い。したがって、概して土壌の層は厚く、1メートル50センチほどあり、壌土や植土が多い。これは農業には良好な条件であり、土壌だけからみれば、満州の多くは農業の適地であるといえる。ただし、前述したように、平坦地ゆえの湿地も多く、塩類を多量に含むアルカリ性土壌がチチハル東部や満州南部のうちの西部に広がっている。その西側には砂漠の張り出しがあり、砂地の不毛地もある。このような土壌の地域的分布は満州農業の基本的な基盤になっており、それが農業地域の特徴を規定している。

満州では土壌をその色で5色に分けている。紅色土と黄色土とが最も多く、ついで黒色土、藍色土、白粘土となっている。しかし、肥沃とされる黒色土は壌土のほか砂土にも見られ、この分類は便宜的である。

以上の特性を踏まえ、満州の土壌の特徴をいくつかの点にまとめると、次のようになる。

まず、大部分の土壌は第四紀層で、うち洪積層は奉天以北、沖積層は奉天以南に多く分布している。ほとんどの農地はこの両層に集中している。一方、古生層や中生層は少なく、安奉線沿いや満州北部に見られる程度である。土壌の種類からみれば、大半が壌土で満州南部に多い。アルカリ土壌も内蒙古とその東側の満州に一部張り出している。ここでは雑草さえ生えないほどである。それに対して酸性土壌は少ない。土壌の中に有機物が少ないことも特徴で、したがって、窒素は少なく、農業には不利であるが、燐酸は多く、水分や養分を維持する上で農業によい条件であり、ローラーをかけることで水分の蒸発を防ぐことも可能である。

以上の地層と土壌の観察記録から、満州および内蒙古の土壌分布について概念図を作成すると図11のようにまとめることができる。くりかえすまでもないが、第四紀の洪積層と沖積層をベースにし、黒土の肥沃な土壌と不毛なアルカリ土壌の分布を中心に示したものである。

土壌の形成には気候条件も作用する。満州の気候は南と北、東と西でかなり異なるが、大きく見れば、暖帯北部に属する内陸に位置する大陸性気候である。夏は7月を中心にかなり温度は上昇するが、冬はかなり寒冷であり、植物の分解が進まず、それが前述したように土壌のなかの有機質分が少なくなっている理由になっている。

農業を行ううえで無霜期間は重要である。それ

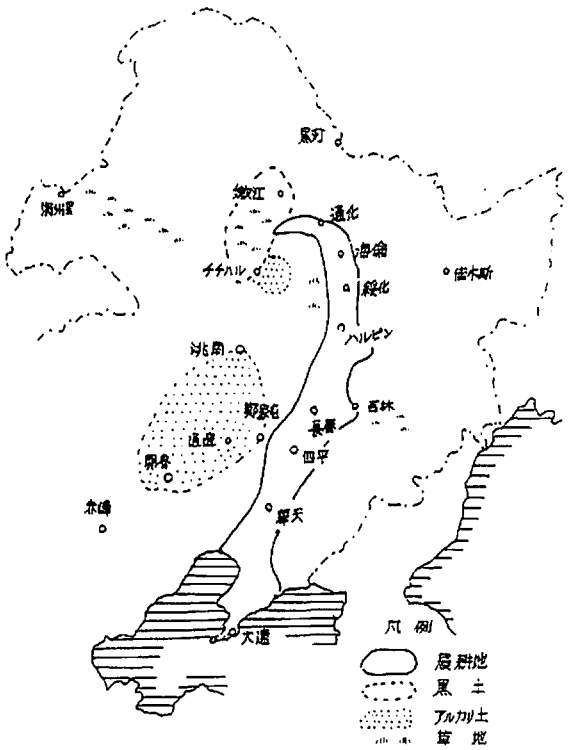

図11　書院生の記録から見た20世紀満州事変以前の満州における農地利用の概念図（各記録より作成）

以外が農業期間であり、北部は春から6ヶ月、南部は7ヶ月である。例えば、ハルピンは140日、長春は150日ほどである。水稲耕作も可能であり、朝鮮人が始めた間島地方を中心に、吉林地方や海林などハルピン北部に見られる。これは7月から8月にかけて年降水量の80パーセントが集中するために、水田耕作を可能にしている。しかし、前述したように、降水量の集中はときに大洪水を引き起こしたりする。また、年によって降水量が極めて少ないときもあり、雨乞いもしたりするほど不安定な気候でもある。灌漑用水の施設が不十分なことも水田農業に不安定感をもたらしている。なお、満州中部で大体年500ミリほど、西へ行くほど降水量は急減する。

以上の特性を1920年代の現地でのデータを引用した記録がある。それを用いて場所別の気候状況が比較できるように図示した。

図12は満州の主な観測地点の気温の月別変化をしめしたもの。また、図13は同じく降水量の変化を示したものである。各地とも最寒月は1月で2月がそれに次ぎ、北満州の牡丹江ではマイナス20度にも達し、南満州の奉天はマイナス13度、長春ではマイナス17度で、内陸に位置するために寒冷である。それでも南の奉天からは北上するにつれ3度ずつ寒冷さが厳しくなっている。南端にある大連はマイナス5度にとどまっている。そして、0度以上になるのは南満州ではほぼ3月から

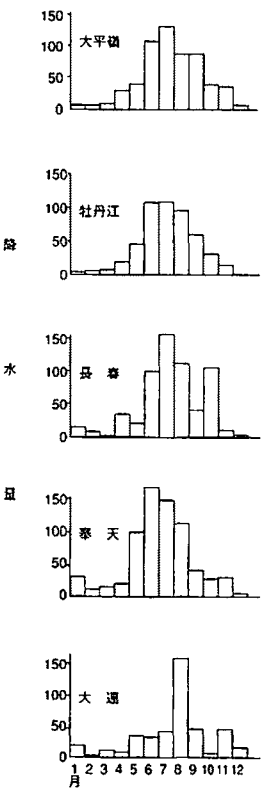

図12　満州の主要地における気温の分布

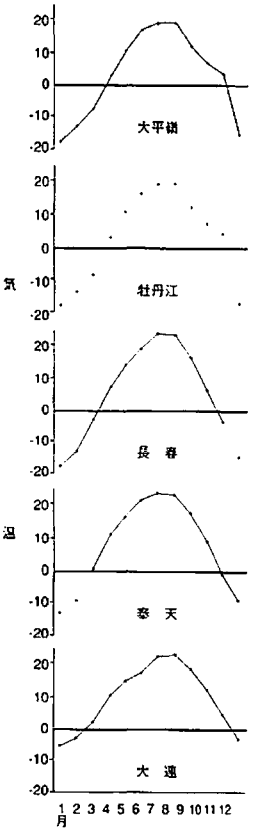

図13　満州の主要地における降水量の分布

ら、北満州では4月からである。農作業は南満州から始まり、北満州は1ヶ月おくれることがこの気温の変化からわかる。そして5月と6月は気温が一気に10度代へ上昇し、農作業は最盛期を迎える。このときの気温に低温など異常が生じると、農作物の収穫に影響を与える。作物の生育期間は短いため、ほとんどが一毛作であり、やりなおしがきかないからである。7月と8月は最高気温の月で、日本と異なり7月の平均気温がもっとも高い。これは中国大陸も含め海陸に共通する。この時期最も農作物は成育期、8月に入ると背丈が急

に伸びた高粱の目立つ姿が書院生の満州での記録のなかに多く見られる。

しかし、この7月と8月、9月は、次の図13に示すように、最も降水量が多く、そのうちでは8月が最も多い。この3ヶ月で年間降水量500ミリから600ミリの8割が集中する。それが、前述したように時に豪雨になり、河川に氾濫をもたらし、高粱でさえ背丈がしずむほどになって、大きな被害をもたらしたりする。収穫期にあたる北満州では8月から9月上旬、南満州では9月に豪雨があると農作物の収穫に影響がでることになる。

なおこの7，8，9月の平均気温については20度を前後し、南も北もそれほど変わらない。最高気温は30度を超える日もあり、作物の栽培には十分である。それでも月平均気温が20度代の前半にとどまっているのは、この時期に前述したように、雨の日が1か月あたり10日ほどあり、比較的多いためと思われる。

(7) 満州農業の農法の成立基盤

では、以上のような自然環境もベースにしながら、満州での農業はどのような農法にその特徴があるのであろうか。

すでに述べたように、満州地域はかって一部に漢人の流入があったとはいえ、清朝の政権下では、満州全域が満州族の聖地とされ、漢人の入植も禁止するほどの禁封地として管理されてきた。したがって牧畜を生業とする満州族の中から、農業が広く行われることはなく、その時代は見るべき農業およびそれを支える農法はなかったといえる。

その状況が変化したのは、1880年代にロシアの勢力が南下し始め、満州北縁地域を占有し、さらに黒竜江を超えて南下に転じ、やがては東支鉄道をシベリア鉄道から分岐してウラジオストックまで北満州を横断敷設するにいたったからである。そのようなロシアの動きに対抗するため、清朝の軍隊を中満や北満へ派遣しようとしたが、その多くは北京での生活に埋もれ、満州中・北部を守る力を欠いていたとされる。前述したチチハルも前線から後退し、そこに軍隊の基地を作った場所だとされる。しかし、そのような対応では不十分で、その補強に漢人の入植を一部認めることになったのである。つまり彼ら漢人は清朝政府の北の守りに利用されたのである。

したがって、入植者が急増したわけではなく、最初は農作業や森林伐採、道路や後に鉄道建設などの春から秋にかけての出稼ぎ労働としての渡満が多かった。しかも、出稼ぎ先はみな南満州が多く、日清戦争や日露戦争がそれらの動きを中断した。それが1910年代に復活するが、それでもなお出稼ぎ労働力としての移動が多かった。このころになると、南満州鉄道を中心にした日本資本の進出があり、土木建設部門の労働力が必要とされたからである。しかも1911年の中国での辛亥革命により清朝政権が崩壊し、清朝の制約を受けなくてもよくなったこと、しかし、各省に軍閥を生み、山東省のように軍閥の横暴により不安定な政治社会情勢が生じ、農民や商人が逃げ場を求めたことがあった。

山東省で言えば、農民や商人のその逃げ場こそ満州であった。すでにそれまでの出稼ぎによる満州の情報が入っており、しかも距離的にも近く、渡満は比較的容易であった。

その際、農民たちは、山東省での手作業による零細な農業方式を持ち込むが、冬季の耕作はできず、一毛作だけしかできない気候条件から、農地の開墾面積を山東省時代以上に拡大する必要があった。したがって人力ではまかなえず、新しい方法が必要であった。それが馬耕であった。これはすでに先発で入り込んで地主に小作人として雇われた農民はそこでの経験から学習するチャンスがあった。先発農民たちは、蒙古人たちが操る馬を調教して農耕馬に利用したからである。そして、この馬耕の導入こそが満州農業を可能にし、それが満州への農業移住を可能にしたのである。した

がって漢人の移民たちは小作人として馬の扱いを学び、金銭を蓄えてまず馬を購入することが大きな目標になっていた。そのため、蒙古人たちとのあいだに当初は馬の市場が各地で開かれた。

こうしてもっぱら畑を耕作する馬耕用の犂が工夫されるようになった。日本でも犂は馬や牛を使用するために早くから使われていたが、水田と畑に利用するため、小回りがきくように小型の犂が一般的であった。それが満州では、畑だけの広い面積をカバーしなくてはならないこともあって、犂は大きく、粗放的な農業に用いられるように発達した。開墾作業には馬が5－6頭は必要であり、熟畑の耕作でも2－3頭を使用する。北満州では熟畑でももう1－2頭が必要であった。これは南満州に卓越する沖積層よりも北満州や東満州に卓越する洪積層の土壌方が硬いことの表れであった。

これらの犂は土壌の条件や、その土地が新しく開墾される場合か中耕される場合かなどにより大きさや形に少し変化がある。基本的な犂の種類には、開墾用の大犂、一般用の施犂、中耕用の錫犂、菜園用の小耕転機の4種類がある。

材料はエンジュ、ニレ、シラカバ、ヤナギの木など地元にある材料を使い、ほとんど自家製である（写真1）。

最後にもう一点、満州農業の気候上の特徴がある。

前述したように、満州では夏季に降水が集中するとはいえ、1年間の降水量は500ミリから600ミリ、内蒙古ではさらに減少する。満州の年間降水量は日本の東海地方に比べれば、その3分の1に過ぎない。しかも農作物の播種期の春と収穫期の秋には降水量がきわめて少なく、特に春先の播種期に降水量の少ないことは、農業経営のうえで大きな問題である。

そこで、満州農業では、除草を徹底的におこなうことでそのような降水量が少ないことに対処することになった。これは徹底的な除草によって地中の水分の蒸発を防ぐことができるためである。実際、除草は3回、中耕も3回、とくに高粱の場合には4－5回おこなわれているという。一本の雑草も見逃さない除草作業がおこなわれる。

また、それをさらにサポートする方法に中耕の方法もとられている。これは除草とあわせることで、土壌の上層を下層から分断し、地中の水分が蒸発することを妨げる方法である。

第12回の13巻目の報告書によれば、この方法をとることによって、作物は明らかに背丈が高くなり、葉も大きくなり、さらに、葉の数もふえるという。これは作物の生長がよくなるという効果のほかに、多くなった葉やその数が地面への直射

写真1　江省における山東農民の開拓と犂
（東亜同文書院製第14期生「風餐雨宿」より）

日光をさえぎり、地中の水分の蒸発を抑えるという効果もありそうである。

また、乾燥に強い作物も選ばれている。大豆、小豆、緑豆、粟、ほか禾本科の作物がそれで、大豆はその後の満州を代表する商品作物へ発展したほどである。

6．農作物の栽培と農業経営の特性

(1) 農作物の栽培と輪作

以上のような条件の中で栽培される作物についてはいくつか指摘したが、栽培作物についての記録は報告書としていくつかあり、かなり詳細な報告書もある。ここでは第24回（1930年）第13巻の報告書〈満州農業事情〉のなかでの栽培作物

についてみてみる。

全体としてみると、前述したように、気候の制約から、栽培農作物の種類は少なく、しかも同じ作物の品種の数もかなり少ないとしている。

その中で、主な作物は、高粱、大豆、とうもろこし、粟の順に多いが、そのほか大麦、小麦、陸稲、綿、水稲、大麻などがあり、そのうち高粱、大豆、粟が満州特産の3品だとしている。書院生によるこれら「3品調査」と銘打った調査報告書もいくつかみられるほどである。以下主な作物について触れておく。最も多く栽培されている高粱については、7，8，9月の調査旅行のなかでは必ずといっていいほどふれられているほどである。高粱は別名紅根ともいわれ、南方種と北方種がある。精白されると高粱米として食用にされ、農民はもちろん多くの満州に住む人たちの主食になっていた。それに対して非精白の高粱はもっぱら飼料として用いられた。そのほか食料以外にはアンペラ、パルプ、稈など多面的に利用され、日常生活とは密接な関係を持った作物である。

大豆は元豆、豆子などとも呼ばれ、農家は、広く一般的に栽培されている。満州大豆を黄豆、油分が少なく不良品的な大豆を青豆、とよぶ。そのほか黒豆、磨石豆という豆も区別している。食用が多いが、大豆油の生産にも使われる。満州大豆は内需用が主であったが、世界の中での商品化は1920年代からその地位を得るようになってきた。

粟は穀子、谷子とも言われ、精白すると、小米、小黄米といわれ、乾燥に強いため、内蒙古地域での栽培が多い。主な食料と飼料として用いられる。

とうもろこしは包米などとも言われる。南満州では饅頭に使用され、北満州では高粱が不足した時に高粱酒の原料として利用される。茎は燃料に利用され、寒冷地の満州においては生活に欠かせない。

これらの作物は、気候的に生育期間が短いために一斉に播種し、成長し、収穫する。そのため農作業は忙しく気象の変化には敏感になる。

前述の第24回第13巻の報告書は調査した年の南満州の気象の状況と南満州の作物の成長についての関係について次のように記録している。

3月22日から5月22日の期間は低温で降水量も多く麦類の発芽が遅れた。しかし、次の6月21日までには高温となり、発芽は良好となった。次の7月22日までの1ヶ月間も気温が高く、しかも降水があり、発芽の条件は良好、続く8月23日までの1ヶ月も気温は安定し、乾燥しすぎることはなかった。ただ開花時期に雨があり結実が心配されたが、長雨にならず順調に生育した。次の9月22日までの1ヶ月間は気温の低下がみられたが、地温が高く晴天もあり収穫前の時期としては良好であった。そして9月22日から11月22日までは、降水量が少なく、気温も安定し、一部に局地的な乾燥があって、実の落下があったが、収穫は良好に推移した。したがってこの年は全体として良好な収穫に恵まれた。

ところで、これらの作物は連作には限度がある。この点について、第12回第13巻の報告書では南満州のケースとして、次のように記録している。

すなわち、一般的に南満州の場合、家畜も多く土糞の施肥ができるが、それでも最も多い高粱の場合、連作は2－3年で、大豆の連作はできない。なお、この場合の土糞とは、人糞と家畜の糞に青草と土を混ぜたもので、家畜の糞の中では飼育している馬糞が主である。糞そのものを農地へ撒いたりはしない。馬糞をとり、それを本格的に肥料にするためには、厩舎を作る必要がある。書院生は、満鉄の公主嶺農業試験場によるこの肥料の分析結果について、この肥料が土壌に不足している有機質の補充と窒素の供給をおこなうため優れているが、加える土には何の肥料的価値もない、としている。肥料を使うほとんどの農家は、この土糞を使うが、都会で売られる乾糞が売られることもある。これは農民が高粱や粟、包米などを主食にするのに対して、都会人は麦の主食が多く、都会人の糞を町の街路から拾い集め、それに牛馬糞

を2割ほど混ぜ、もち状に丸め乾燥させ、乾燥させたもので、販売品である。

再び、連作の件にもどすと、例えば、ある事例では、1年目に高粱に施肥をして栽培するが、2年目には粟か包米を栽培、3年目に大豆を栽培する連作体系を実施している。

また大豆栽培中心の事例では、1年目に大豆に施肥をして栽培し、2年目に高粱、3年目に粟か包米を栽培する輪作体系を実施している。

高粱や大豆の場合、少なくとも3年に1回は施肥をおこなうのが一般的である。

このような輪作体系は満州での経験の中から生み出されてきた。その結果、次のような輪作のパターンが見られるようになっている。

高粱については高粱、粟、包米、麦。

粟については大豆、包米、麦。

大豆については、高粱、包米、麦。

包米については、高粱、包米、麦。

麦については、大豆、包米。

(2) 農業経営の環境—1929年代の農地地価の上昇—

最後に、満州農業の経営的な特色についてみてみる。

前述したように、満州における農業の歴史は新しく、本格的な始まりは20世紀に入ってからである。1880年に清朝政府による対ロシアを目的とした漢人への農地開墾の開放があったが、それはまだ開墾の幕開けであり、農業は開拓時代で、自給農業のレベルであり、農業経営として独立的に見られるレベルにはなかった。

移住した漢人たちも、交通条件の悪く、ロシアの勢力が拡大しつつある北満州まで入り込むことはなく、前述したように、農業以外の仕事を求め、出稼ぎも多かった。そんな中で比較的農業への入植がみられるようになったのは、南満州地域であった。農地開発が可能な土地は、満州事変の直前までに、80パーセント近くに達していたとされる。北満州や内蒙古とは大きな差があった。

そこで、満州の農業経営についての観察や分析は、南満州でないとできなかったといえる。

第24回第54巻(1930)の調査報告書の中に、「南満農民の生活」という報告記録があり、この報告はまさに満州事変直前における満州農業を南満州に焦点を当てた記録である。この報告書の目的は、南満州鉄道がどのように満州農業に貢献し、漢人の農業者と将来の日本人の農業者の共存の可能性について検討する、としている。この時期に満州が日本人の目に身近な存在になっていたことがわかる。ただし、報告書の内容は、政治的ではなく、南満州の農業の実態を、満鉄の資料や観察によって検討しようとしたものである。

この中で、いくつかの南満州農業の視点がある。ひとつは1920年代における農地価格の変化をみたものであり、またもうひとつは農民の土地所有をベースにした社会階層についての視点である。

まず、1920年代の約10年間の南満州各地の農地価格について、のデータが収集されている。それによると、南満州でも、南へ行くほど農地地価が高くなること、南満州鉄道沿線ほど農地の地価が上昇している傾向が指摘されている。

1920年代は、漢人の移民が南満州へ押し寄せた時代であった。そのすべてが農民であったわけではなく、奉天や長春、ハルピンなどの都市をめざす商人や、そんな都市で何か職にありつきたいという山東省や直隷省などからの移民で、移民数はピークに達した。これについては、筆者がその動きを分析言及したことがある。その背景には、両省における軍閥による内戦から多くの人々が満州へ逃れようとしたこと、一方満州では、更なる鉄道建設などの公共投資が進み、多くの労働力を必要とし、また日本は軍事的基盤をいっそう作りつつあり、それに関係した資本による投資なども多くの労働力を必要としたことがあり、日本人もそんな動きの中で満州へ渡るケースが増えつつあった。また、満州産の大豆がこの時期になって

それまでの内需品から不況は経験するものの、日本への輸出など国際商品への新たな市場をみつけたこともあった。

当然、そのような中で、漢人の農民の移民は多く、特に南満州では農地の需要が高まった。また、あわせて官吏や商人たちによる南満州中央部の土地への投資も増えた。その背景には、この時期に生じた軍閥間の奉直戦争によって、地元の貨幣である「奉天票」に不安が生じ、それが貨幣から土地への投資へ転換した面もあった。それらが農地価格を上昇させたのである。1920年代の10年間に農地価格は平均2倍の上昇を示した。そしてそれは農地以外の土地も吊り上げたのである。

さらに鉄道の新設開通もまた農地価格を引き上げている。内蒙古ではあるが、四兆線の開通はその沿線の価格を上昇させた。価格レベルは南満州より低いが、上昇率はかなり高く、未開墾地でさえ、既開墾地のほぼ半分ぐらいとする記録がある。鉄道の開通を狙って多くの投機的投資が南満州の外接部でも生じたという事例である。1920年代の満州はこのことからも投資の対象になる環境が生まれていたことを示している。

(3) 生産基盤と農業経営

すでに、満州農業において農地開発が本格化したのは20世紀にはいってからであり、1920年代に多くの漢人が農業の入植をおこなったこと、そのため南満州では、かなり開墾が進んだことなどを述べた。したがって、比較的早い時期に入植した農民と、新しく入植した農民とのあいだには差が生じていたことも当然である。

そこでここでは同じく南満州の1920年代の書院生が示したデータをベースにしてそのような状況も含め、農民たちの生産基盤についてみてみる。

なお、当時信頼にたるデータは民国側や地方政府側にはなく、満鉄のデータが最も信頼できたため、書院生も満鉄のデータの中から必要なデータを取り込んでいる。

表1は1921年（大正10年）の撫順近くの10戸農家について、農地の所有規模別農家数を示したものである。規模は日本の町歩で示してある。それによると、10町歩以上から3町歩未満までかなりの格差が見られる。平均では1農家あたり6町歩となるが、そのあたりに頻度は高くなく、平均値に意味はない。

表1　愛撫順付近における10農家の農地所有規模別

農地面積	農家数
2－3町歩	3戸
3－6町歩	2戸
6－10町歩	2戸
10－20町歩	2戸
合　計	10戸

（第24回第54巻「南満州農民の生活」より）

前述したように、満州の農業では馬耕が不可欠である。馬は2頭立ての耕作が一般的であり、その場合、10町歩ほどの農地が耕作可能になり、それが農家として独立的におこなえる経営規模となる。もし、それに満たない農家の場合には、大規模農家の農業労働者として雇われ、耕転や運搬作業などに従事することになる。1930年代になって日本政府は満蒙開拓に乗り出すが、そのときの1農家あたりの農地規模の標準をほぼ10町歩に設定しているが、それは満州農家の書院生の観察と一致している。馬を使った家族農業の規模は、結局馬の能率によって規定されることを示している。

したがって、大規模経営をするには、馬を増やし、その分農業労働者を雇うことで成立する。当時次々と農業労働者が満州へ流入してくる状況下で、規模拡大は可能であった。それが農家の間の階層差を拡大したといえる。

もうひとつのデータを見てみる。表2は1925年の遼陽付近の806戸の農家の農地面積規模別の農家数比率を示したものである。それによると、農地を持たない農家が10パーセントを占める

が、3町歩未満の農家が実に50パーセントを占め、一方、標準規模の10町歩以上の農家数は20パーセントに過ぎない。そして標準規模を3倍以上の30町歩以上の農家数はわずかではあるが全体の2パーセントの17農家を数える。これらの大規模農家は、10町歩に満たない農民たちを利用して雇用し経営をおこなっていることが伺われる。このように農地の農家間での規模はかなり大きく、一部の地主と大多数の農業労働力にも依存する農家が圧倒的に多いといえる。小作の場合も小作料は40パーセントと高率である。

表2　遼陽および蓄陽権における806農家の所有農地面積規模別農家数比率（1925）

所有耕地面積規模	比率（%）
所有農地なし	10
3町歩未満	50
3－6町歩	13
6－12町歩	10
12－18町歩	10
18－30町歩	5
30町歩以上	2
合　計	100

（東亜同文書院生第24回第54巻「南満州農民の生活」より）

このような農家の間の階層差は、当然生産から農具、食料を含む消費、そして収益のレベルに影響する。

そこで、農家の規模を分けて、20天地（12町歩）以下を小農家、20から50天地（30町歩）以下を中農家、50天地以上を大農家とすると、次のようないくつかの特徴が見られる。

まず、農具のうちもっとも重要な犂の数を見ると、大農家では菜園用の犂を除くと平均14個、中農家では11個、小農家では5個となり、農地面積に応じて両者の間には比例的な関係が見られる。それは1町歩あたりの農機具購入価格にも現れ、大農家では11.2元であるのに対して、中農家では12.0元、小農家では15.6元となり、規模の経済がより大農家に効率てきに効いていることがわかる。施肥のための肥料代も、大農家は購入肥料を使用するため面積あたりの収量は多いが、中農家や小農家は前述した土糞のような自給肥料をしようするため、大農家のような収量は得られない。

そこで経営農地面積の規模別収益額を見ると、図14のようになる。全体からみると、農地面積が増加するほど収益はそれに比例するように増加し、自作農の間でも大、中、小の農家規模でかなりの違いのあることがわかる。大農家では家族数にかかわらず、それぞれの経営面積で十分な利益をあげることができ、中農家では、家族数が10人以内なら30天地の規模があれば生活ができるが、家族数が10人以上だと50天地以上が必要になる。当時家族数は多い時代であり、農地の規模は家族数によっても影響をうけた。

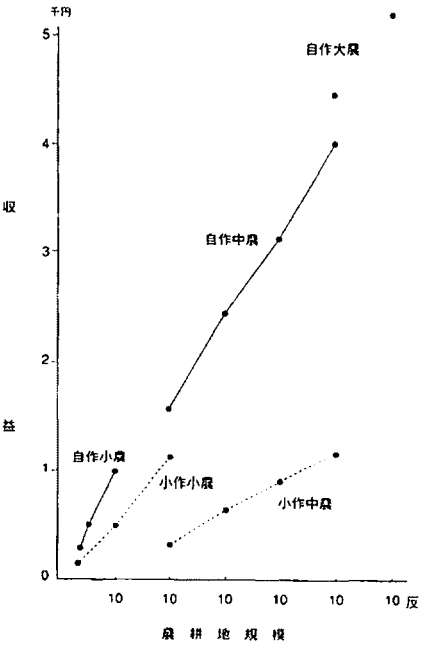

図14　南満州における農家規模と収益との関係図（東亜同文書院生の報告書より）

同図には小作層の収益についても示した、40パーセントという高い小作料もあり、自作農に比べて、規模の増大があっても収益の伸びは自作農に比べて低く、その結果収益のレベルもかなり低

く、とくに10人以下の家族の場合、10天地以上耕作しないと収益はない。また、家族数が10人以上の場合には15天地は必要とされる。

以上のような農地規模の格差は、それぞれの消費経済のレベルにも大きくあらわれ、農村における消費力は当然大農家が中心であり、独り占めをしているに近い。

したがって中、小の農家は少しでも農地面積を拡大しようとし、それが農地需要を高め、農地価格を高める動きにつながる面もあるが、農村における金融機関の発達は極めて未熟であり、質商や商人程度しかない。都市部に登場した日本などの金融機関はもっぱら大農家が取引をおこなっている。したがって大規模な農家はますます資金も豊富になり、農地も集まり、農家の間はますます格差が拡大することになる。1920年代の満州への農民の移住や農地価格の上昇は、大農家にとってより有利に働き始めたといえる。

ところで、農家にとって、天候異変は農業経営にとって大きな影響をあたえるが、もうひとつ、馬賊の影響も大きかった。書院生たちは各地で馬賊のうわさを聞き、馬賊が襲撃したあとの焼けた村を見たりしている。満州国がこのあと成立した後も新政府にとって馬賊の問題は対処すべき大きな問題であったことからもその問題性がわかる。馬賊の襲撃で農家はときには再生できないほど痛手をこうむることがしばしばあったという。1920年代にはその被害は多かったが、ケシの栽培の禁止や1924年の豊作で1925年以来その被害が減少しているとしている。

7．おわりに

以上、20世紀前半期、それも満州事変以前の時期を中心に、東亜同文書院の書院生たちが記録した満州の農業開発の状況を浮かび上がらせようとした。

満州は清朝の政権下では清朝の聖域として保護され、長く漢人の新たな入植を禁止してきた空間である。それがロシアの南下に対抗して、その一部で1880年から漢人の入植が認められ、20世紀にはいってから本格化した。そして、そのピークは1920年代で、それはその直後に満州国が成立する直前までつづいた。とくに南満州がその開拓の中心であった。

したがって、この時期は、いわば満州の農業上の開拓開始期といってよいだろう。開拓がさらにすすむのは、次に満州国が成立し、日本から100万人を越える満蒙開拓農民が。のこる空間、とくに1920年代には未開拓地が圧倒的に多かった北満州や東満州、さらに内蒙古が埋められていったからである。それはかなり計画的な配置と計画性があり、1920年代以前の状況とは異なっている。そこで本研究は日本人による計画的な開拓が進められる前の満州農業の開発状況をまず把握することを目的とした。それは次の1930年代以降の研究を次なる課題とし、全体として20世紀前半期の満州における農業開発を把握するための基礎的研究としたためである。

その際、東亜同文書院の大調査旅行の記録を使うことで、多少でも臨場感を踏まえて、農業開発の実態を浮かび上がらせようとしたところに、本研究の方法的なそして研究上の特徴がある。

書院生は行動範囲が広く、とくに満州全域におよぶ大旅行をし、多くの調査観察対象を記録している。1920年代までの当時、満州を訪れた日本の知識人もみられたが、都市部中心であり、広く全体を見ることはなかった。その点で書院生の記録は価値があるといえる。満州国成立以前の満州については、満鉄の調査研究以外にはほとんどなかったからであるといえる。

書院生の記録からあらためて20世紀初期の満州の農業開発は南満州にほとんど限られていたこと、北満州などはまだ少数の漢人たちの試行的な入植段階にあり、失敗も多かったこと、1911年に辛亥革命によって清朝が崩壊すると、中国本土

で軍閥間の内戦が深刻化し、満州の対岸の山東省はとくに乱れ、山東省の人々は清朝の支配がなくなった満州へ出稼ぎや入植目的で渡ったこと、などが実態としてあきらかになった。直隷省の農民も加わったが、実質的には山東省出身者が満州の一時的だが中心的な開拓をおこなった。書院生の記録の中に、彼らが船や鉄道、そして徒歩で満州へ向かい、満州のなかをさらに進む姿が描かれている。

そして山東省とはかなり異なる自然環境ではあるが、比較的肥沃な農地も多いことから、短い作物の栽培期に即応した馬耕の利用と犂の開発、土糞、徹底的な除草と中耕による乾燥気候対策などを工夫し、満州農業の特質となったこともあきらかになった。しかし、満州の気候は厳しく、また変化に富んでいる。夏季のときに発生する豪雨は大きな水害は農業どころか、村の崩壊さえもたらした。書院生もそんな水害をもろに体験しており、水害の規模を実感させる記録となっている。

そのようななかで、入植過程や入植時期、農地の入手などにより、はやくも農地面積に階層差がでて、農民間は一律ではないこともあきらかになり、大規模経営者がますます有利になる方向が1920年代に進行していることもわかった。

1920年代は一段と入植者がふえ、鉄道建設も進み、農民だけでなく、商人やそのほかの職探しの人たちも加わり、とくに南満州では、単なる農業開発だけではなく、広く社会の形成もみられるようになった時期でもある。そしてそれを支えたのが農業開発であった。

このような状況が、次の満州国の成立の中で、新たな日本人の入植者を加え、どのように展開して行ったか、それが既存の満州農業と農民とどのようにかかわったかが、次の研究課題である。

参考文献・資料

1. 田中秀作（1930）満州地誌研究、古今書院、411 p。
2. 朝鮮及満州社編纂（1919）満州地誌、同社出版部、282 p。
3. クレッシー原著、三好武二訳（1940）満州支那の土地と人、偕成社、625 p。
4. 東亜同文書院第8期生（1911）旅行記念誌、東亜同文書院
5. 東亜同文書院第14期生（1918）風餐雨宿、東亜同文書院
6. 東亜同文書院第15期生（1919）利渉大川、東亜同文書院
7. 東亜同文書院第16期生（1920）虎風竜雲、東亜同文書院
8. 東亜同文書院第19期生（1923）虎穴竜領、東亜同文書院
9. 東亜同文書院第20期生（1924）金声玉振、東亜同文書院
10. 東亜同文書院第22期生（1926）乗雲騎月、東亜同文書院
11. 東亜同文書院第23期生（1927）黄塵行、東亜同文書院
12. 東亜同文書院第24期生（1928）漢華、東亜同文書院
13. 東亜同文書院第25期生（1929）線を描く、東亜同文書院
14. 東亜同文書院第27期生（1931）東南西北、東亜同文書院
15. 東亜同文書院第28期生（1932）千山万里、東亜同文書院
16. 東亜同文書院大旅行調査報告書、第24巻、第13巻（1930）、満蒙農業事情
17. 東亜同文書院大旅行調査報告書第12回第13巻（1918）
18. 東亜同文書院大旅行調査報告書第24回、第54巻、南満農民の生活。
19. 東亜同文書院大調査旅行日誌、第22回、第8巻、その6（1926）
20. 東亜同文書院大調査旅行日誌、第22回、第9巻（1926）
21. 満鉄総裁室広報課（1941）満州農業図誌、非凡閣、194 p。
22. 藤田佳久編著（1995）、中国を歩く、大明堂。東亜同文書院大調査旅行記録第2巻　848 p。
23. 藤田佳久編著（2002）中国を記録する。大明堂。東亜同文書院大調査旅行記録第4巻。580 p。
24. 藤田佳久（2000）東亜同文書院大調査旅行の研究、大明堂、320 p。
25. 藤田佳久（2003）20世紀前半期における旧「満州」地域の地域システムと地域増に関する研究—漢人の満州流入を中心に—（その1）、愛知大学国際問題研究所紀要、第121号。
26. 藤田佳久（2003）同上、第122号。

〔付記〕

本研究は平成17－18年度文科省科学研究補助金（基盤（C）課題番号17520546）にもよった。記して謝意を表したい。